おおそらをとぶ。

■1■

ほんのりと陽の気に満ちた空には、刷毛で描いたように薄く雲が伸び、傾きかけた日差しを彩っている。

　穏やかな風は春の暖かさとともに土の匂いを運び、遠く山の向こうへと吹き抜けてゆく。春告精（リリーホワイト）の笑顔と共に、生命が芽生え育つ息づかいが幻想郷のあちこちから聞こえていた。

「………♪」

　祀られる風の人間、東風谷早苗は暖かな風を胸一杯に吸い込んで、新緑芽吹く春の空をゆく。

　身体を傾ければ、頬に受ける風は転じ、視界が巡る。

　少女の姿は蒼天にあった。伸ばした巫女服の袖は緩やかに波打ち、三六〇度の絶景の中、風祝は遮るもののない空を舞うように飛ぶ。

　早苗が守矢神社の二柱とともに幻想郷にやってきて、少なくない時間が過ぎていた。賑やかな無何有の郷での生活は騒がしくも慌ただしくもあり、苦労もあったが得たものもまた多い。

　そんな中でも、彼女が一番気に入っているのは、このどこまでも続く空だった。

　風祝の名の通り、少女の奇跡の力は強く、大気、空に結びついている。元居た世界では自由に空を飛ぶこともできなかった早苗にとって、こうして空に身を躍らせることは、何よりも強い解放感を与えてくれるのだった。

「……と、いけないいけないっ」

　いつのまにか、帰り道を大きく外れていたことに気付き、早苗は慌てて進路を神社に向け直した。

　今日は人里での用事の帰りだ。昼過ぎには戻るつもりだったのを途中あちこちで引き留められて、気づいたときにはお日様は天頂からだいぶ低くなっていた。

「信仰が集まるのはいいことなんだけど……」

　帰りを待つ神様たちには里の分社を通じて連絡は入れたものの、そろそろ夕方のお務めとご飯の支度を始めなければならない時刻だ。

　少し急ごう、と早苗が速度を上げた時だった。

「ふっふっふ……」

　ふと視界に射した影に、振り仰いだ早苗の眼前に、ぬうっと紫色の未確認飛行物体が姿を現す。

　大きな目玉にべろんと揺れる真っ赤な舌。古びた茄子色の大きな傘が、ふわりふわりと空に漂いながら、大きな口を開いた。

「うらめしや～」

精一杯つくったのであろう低い声を出しながら、傘の下から色違いの眼をした少女が顔をのぞかせる。

「……ああ、また出た」

「むーっ、なによ、その反応はっ!!」

早苗が呆れた顔を浮かべると、お化け唐傘の多々良小傘は不満そうに口をとがらせた。

早苗が彼女と初めて遭遇したのは、先日の宝船騒動でのことである。以来、なぜか早苗を驚かせようとえらく御執心の小傘なのだが――その方法はと言えばうらめしやのワンパターンで、一向に成果は上がっていない。

すっかり顔見知りになってしまったお化け傘は、今日もばさばさと茄子色の傘を揺らし、片目を閉じてぺろっと小さな舌を見せ、精一杯声を張り上げる。

「ほらあ、驚きなさいってば!!　おばけだぞー、うらめしや～っ!!」

「裏、裏って、よっぽどウラものが好きなんですね？　表じゃもう刺激が足りないんですか。ああいやらしい」

「ひ、ひどい言いがかりだっ!?」

折角の頑張りをばっさり斬って捨てられ、叫ぶ小傘。

口をへの字にして頬を膨らませるお化け唐傘に、早苗はひらひらと手を振って見せた。

「よくこんな明るいうちから出てこれますね。また退治されたいなんて、さでずむとやらもご苦労様です」

「そんなわけないじゃない。今日こそ頑張って人間を驚かせるのよ!!」

茄子紺色（ダスキィパープル）の傘をぶんと振りまわし、胸を張る小傘。

「無理だと思いますよ？　ぶっちゃけ才能ないですし、あなた」

「ひどっ!?　そこまで言われる筋合いないと思うな!?　他の巫女とか魔法使いなら、もっと曖昧に『いるよりはいない方がマシ』とか『遺憾ながら鋭意努力に期待』とか言ってくれるのに?!」

そっちのがもっと酷いなと思いはしたが、そろそろ面倒なので指摘するのはやめにして、早苗は手に腰を当てて小傘に向き直る。

「だいたい、前から言おうと思ってましたけど……あなたは人間をおどろかせたいんですよね？　なら、どうしていつもわざわざ――」

袖の中から御幣を取り出し、遥か眼下に大地を臨む周囲の空を示してから。早苗はその先端をびしっと小傘の鼻先に突き付ける。

「こんな空の上で待ってるんですか？」

「は!?　そう言えばっ!?」

これまで考えもしていなかったのか、小傘はたった今気付いたとでも言うように大口を開けた。
「思ってた以上に間抜けなんですね……」
心の底からの同情だったのだが、小傘にはお気に召さなかったらしい。
「う、うるさいうるさいっ。こ、これはねっ、そう、そうよ！　あなたを待ち伏せしてたんだからっ！」
「……ま、どっちでもいいですけど。実害がなかろうと人間に悪さしようとしている妖怪は見過ごせません。退治してあげます！」
「言ったな、やってみろーっ!!」
こんなやり取りももう慣れたものだ。妖怪と人間の間には、こうした交流は不可欠でもある。
「先手必勝！
——傘符『パラソルスターシンフォニー』っ!!」
いきなり突っ込んできた小傘の先手で始まった、いつもの弾幕ごっこは、
……無論、わずか数回の攻防でけりがついた。

◆　◆　◆

「うぅ〜ら〜め〜し〜やぁーーーーーぁぁ………」

撃ち落とされた小傘は、程よく焦げつつひるひると地面に落ちてゆく。ドップラー効果付きで退場してゆく彼女の姿を見ながら、早苗は小さく溜息をついた。
「そうなのよね。……やっぱり、人をおどろかせるには空の上はあんまり向いてないのは確かなんだ」
常識に囚われていてはいけない幻想郷ではあれど、そこに住む者たち全員が歩く代わりに空を飛んでいるわけではない。人里の大半のものは飛べないのだし、幻想郷にあっても空を飛ぶことは、一部の人間にしか叶わないことだ。
だから、人々の信仰を集め、空を飛ぶことのできる早苗は、不思議の満ちた幻想郷にあってさえ『普通』よりも『特別』の側に属している。
でも——
それは、元居た世界での『特別』とは違うものだ。
「………」
自分一人だけとなった薄暮の空の下、いつしかその広大無辺な広さに押しつぶされそうな錯覚を覚え、早苗は小さく身震いする。
穏やかな夕風に巫女服の袖を揺らす早苗の表情は、それとは対照的に物思いに沈んでいた。

■2■

その日も、よく晴れていた。
水面を叩く滝の轟音が、森の木々に囲まれた青空高く響き渡る。
岩を削らんばかりの激しさで滝壺を打つ瀑布から、白い飛沫が珠と散り、うっすらと深渓に虹をかけている。
落差一〇〇ｍをゆうに超える妖怪の山の大滝、波立つ滝壺を見下ろす崖上の岩に、早苗は静かに立っていた。
滝の水気が満ちる湖面の空気は湿って重い。それが陽光を浴びて温まり、流れ落ちる瀑布に沿って上昇気流となり吹き上げてくる。
「……よし」
精神を集中させ、肌のすべて、髪先から指先まで、全身でしっかりと風を感じながら、早苗は軽く頬を叩くと、意を決して地面を蹴った。
少女の身体は重力を支える地面から切り離されて、宙へと踊る。次の瞬間には、少女の身体は垂直落下の最中にあった。
「…………っ……」

下腹部を押し上げるような落下感がこみ上げてくるのに耐えながら、早苗はぐっと息を詰めた。
耳元を吹き荒れる風切り音を感じながら、きらきらと輝いて散る水飛沫の一滴一滴までを見極めるように、落下の加速度の中に身をゆだねる。
（……まだ……っ！）
崖上からの落下は、数秒にも満たない瞬間の出来事だ。
見る間に白く波立つ滝壺の水面が、眼前に壁のように迫ってくる。
同時、宙に踊る身体が、左右に細かくぶれながら、不安定な上昇気流を捕えた。広げた手足が風を孕んで分厚い空気の層をつかむ。
「――――っ!!」
限界まで吸った息吹を胎の底に込めるとともに、早苗は構えた御幣を、湖面に叩きつけるように振り下ろす。
瞬間。
どう、と滝の爆音よりもさらに強烈に、水面を割る飛沫が四方に散って、大きな水柱が立ち上がった。
視界が縦に一転し、強烈な加速度が白い袖を引きちぎらんばかりにはためかせる。水面を鋭く跳ねるように、直角を越えて反り返るような軌道をもって、早苗の身体は上空へと反転していた。

降下から転じて、一気に滝の中ほどまで舞いあがった風祝の身体を、散った滝の飛沫がぱらぱらと濡らす。
濡れた袖が肌に絡み付き、髪先がたちまち湿り気を帯びて重くなった。
「…………はあっ……」
顎に張り付いた髪を払い、どこか浮かない顔で、早苗はゆっくりと、腹の底の息を吐きだした。
幻想郷の少女たちが空を飛ぶ方法は、千差万別である。魔法を使うもの、生来の羽根や能力を使うもの、道具を用いるもの。妖怪達はもちろん小さな妖精達までもが、思い思いに空を飛んでいる。
それは、幻想郷における意志決定手段、命名決闘法（スペルカードルール）における必要条件でもあった。
早苗の飛び方は、気流を生み、風を捕まえてそれに乗るものだ。乾と坤を司る神様二人の信仰を礎に、風と雨をもって神を言祝（ことほ）ぐ早苗は、大気を揺らし風を操って人の身でありながら自在に空を飛ぶことができる。
が、しかし。
「上手くいかないなぁ……」
風を操るゆえに、早苗が飛ぶときには気流の乱れを生んでしまうことを避けられなかった。
乱れた風は音や気配を生み、己の場所を知らせてしまう。それが、早苗にとって弾幕勝負の勝敗を左右する一因となっていた。
（これじゃ、勝てない……）
心の奥にちくりと感じる、小さな棘のような感覚を飲みこんで、早苗は再度、滝の上へと飛び戻る。
早苗が今朝から行っているのは、自分なりに考えた空の飛び方の練習法だった。風をつかみ気流を操る感覚を高めるために、滝の上から今日だけでもう両手の指にも余るくらいロープなしバンジーを繰り返している。
……けれど、何度繰り返しても、度胸はつけども上達の実感にはさっぱり繋がらなかった。
無駄な事をしているのかもしれないという想像が、ふと頭をかすめる。
「……だめだめ、そんな弱気じゃ！」
ぐっと拳を握り、天を振り仰いで。早苗は落ち込みかけた気分を振り払う。
もっと速く。もっと静かに。より正確に、より緻密に。ただ空を飛ぶだけでは届かない、さらなる高みを目指すために。早苗はいっそう巧みな空の飛び方を身につける必要に迫られていた。
……だが、風祝にはその方法が分からない。
なにしろ空の飛び方なんて、これまで早苗自身考えも

しなかったことだ。

外の世界においては、早苗の周囲には数多くの常識があった。

お化けなんていない。

宇宙人なんかいない。

――人間は、空を飛んだりしない。

そこでは異能をふるうことは、ただそれだけで異質なのだ。巷にあふれた『普通』と違うものは、周囲から孤立し、異質な『別のなにか』へと線引きされてしまう。

そして、幼い頃から神様を見、話すことを当たり前にしてきた早苗は、物心つく前から『特別』だった。

風の扱い方も空の飛び方も、口伝による秘術の継承も、奇跡の起こし方でさえも。早苗にしてみればただなんとなくできたというだけのことでしかない。

だから、早苗はこれまで空の飛びかたに上手下手があるなんて考えたこともなかったのだ。

(……らしくないなあ、こんなことでムキになって)

こんなにも自分が負けず嫌いだったなんて、思わなかった。

早苗は自分が勤勉だと思ったことはないし、真面目だと思ったこともない。成績だって中の上だし、運動だって取り立てて得意だというわけでもない。

神社のお務めにしても、昔から決められた通りのことを、言われるままにこなしてきただけだ。

学業の合間に神様に仕える日々は、クラスメイトから見ると厳格で窮屈そうに映っていたらしいが――それでも人並みに飽きっぽくて、人並みに現代っ子で、面倒くさがりだと思っていたのに。

この幻想郷で慌ただしい毎日を送っているうち、いつしか暇を見ては、新しい弾幕のパターンを考え、空を飛ぶ練習を欠かさなくなっている自分がいた。

いつでも、どこでも、ふとした瞬間に心のどこかでその事を考えてしまう。

――まるで、恋しているみたいに。

(……恋、か)

違うけれど、でも似たようなものかもしれない。胸の奥の小さな痛みを感じながら、早苗は静かに苦笑し――

「……あれ?」

と、我に返った。とりとめもない思考を巡らせているうちに、いつのまにか集中が疎かになっていたらしい。

気づけば、早苗の身体は再び滝上からの自由落下の最中にあり、ごうごうと荒れ狂う滝壺の水面がいまや鼻先

まで迫っていた。

「っい!?」

目を剥く早苗の頬を吹き荒ぶ風が打つ。落差一〇〇ｍを超えて叩き付けられる激流が、その冷たさを感じさせるほどの間近、鼻先にまでに迫っていた。

ほとんど無意識のうちに、早苗は身を捻ると同時、片手を前に突き出していた。風祝の奇跡が眼前の恐怖から己の身を守るため、爆発的な突風を引き起こす。

どう、と大気を歪ませ、爆音が轟く。

反射的な防衛行動は、能力の暴発となって現れた。ねじれ、渦巻き、天に昇る龍のごとく。

滝壺から噴き上がった竜巻が滝の水河を呑みこんで水柱となり、空へと屹立する。衝撃波によって流れ落ちる大瀑布が押し止められていた。

大滝を囲む森は猛烈な風に押し倒され、樹齢数百年を楽に超えそうな木々が、次々と傾いてはみしみしと太い幹を軋ませた。

制御も越えて暴走し、急激に高まる風圧の余波に、枝葉が次々と千切れては天高く舞い上げられてゆく。

「きゃぁあぁあああっ!?」

その竜巻の中心で、早苗自身も自分の生み出した乱気流の中に巻き込まれていた。暴走する風の中、錐もみのように身体がバランスを失い、大気の大渦の中に飲み込まれてしまう。

悲鳴もかき消す爆風の中、上下左右も分からないまま、早苗は背を丸め、必死に己の身体を抱きしめる。

「――――っ!?」

空高く宙を躍った瀑布が再び滝壺を打った頃には、大きく吹き飛ばされた早苗の身体は、はるか離れた森の奥へと突っ込んでいた。

■３■

「ん？」
幾重にも重なる巨木の枝が空を遮り、昼とは思えない薄暗さをつくる森の奥。しっとりと湿り気を帯びて沈むひそやかな気配の中、茸の採集に夢中になっていた魔理沙は、突然の頭上からの物音に顔を上げた。
「……なんだ？」
朝からの収穫を放り込んだ籠を背負い、眉をひそめたその時。
ずざっざざ、ばきばきと派手にあたりの梢をなぎ倒して、真上から降ってくる人影が一つ。
「うわぁ!?」
「ひゃあぁあああ!!」
飛びのいた魔理沙の目の前で、べしーん、と派手に土煙が巻き起こる。分厚い苔の生えた古木を吹き飛ばし、転がり落ちてきたのは、見慣れた青と白の巫女服。
「はぅ……」
収穫を詰め込んだ籠を下敷きにして目を回している早苗の姿に、魔理沙はしばし呆然となる。

「……親方。空から巫女が降って来たぜ」
思わず誰もいないところへ報告してから、魔理沙はようやく早苗の傍へと歩み寄った。
「いや、晴れ時々巫女か？　今日の占いにゃ出てなかったけどな。……おーい、早苗、生きてるかー？」
「うぅ……」
ぺちぺちと頬を叩いてやると、風祝はわずかに呻きを漏らし、眼を開ける。
落下の直前、集めた風をクッションにして衝撃を緩和したのだろう。全身ずぶ濡れの上、髪や手足に枝や葉っぱをひっかけて、あちこち薄汚れてはいたが目立った怪我はないようだった。
「あ……魔理沙、さん？」
まだ半分目を回しながらぶるぶると頭を振る早苗の顔を上下さかさまに覗きこんで、魔理沙は呆れ顔で問う。
「なにをやってんだ、こんな所で」
「その、ええと……くしゅっ」
言いかけて。早苗は小さなくしゃみと共に、ひやりと脚を撫でる風に気付く。
どこかで岩にでも引っかけたか、巫女服には腿の上まで大きく裂け目ができており、やたらと風通しの良くなった袴が大きく膝上までめくれあがってしまっていた。

「きゃああ!?」

重力にひっぱられ、さらにずるりと捲れそうになる袴を、悲鳴と共に押さえて。早苗は真っ赤になって魔理沙を睨みつけた。

「…………っ!!」

見ました？　見ましたよね!?　と恨みがましく目元に涙を浮かべる巫女に、魔理沙は頬を掻きつつ、忠告する。

「……あー、なんだ、そのな。飛んでるときは真下から見えっぱなしだから、そういう下着は向いてないぜ？」

「分かってますっ!!」

まじめな顔で言ってくる魔理沙に、早苗は思い切り御幣を振り回して答えた。

◆　◆　◆

……パンツじゃないから恥ずかしくないもん。

と、言う訳かどうかは知らないが、幻想郷の乙女たちの下着が主にドロワーズな理由は、おおむねいつ始まってもおかしくない弾幕ごっこに備えてという実情を踏まえてのことであるという。

少なくとも魔理沙はそう思っているようだった。

実際に激しい運動（弾幕ごっこ）をするうえで、活動的な服装が要求されることは確かなのだろう。その割には誰も彼もが動きにくそうな格好をしているものだと、早苗は自分のことを棚に上げて考える。

「うー……」

涙目になりながら袴の前を押さえて、早苗がようやく落ち着いてきたところで、魔理沙が訊ねてくる。

「いったい何やってたんだ？　最近じゃ空から巫女が落っこちてくるのが流行なのか？」

「…………えっと、その……。飛ぶ、練習です」

誤魔化してしまおうかという考えが一瞬、頭をよぎったものの、結局早苗は素直に白状した。

経緯はどうあれ、派手に墜落して恥をさらしたことには違いはないし、あのまま一人思い悩んでいても進展が見られそうな気もしなかったからだ。

それに――

「どうすれば、もっとうまく飛べるようになるのかって」

「飛ぶ練習ねえ」

空の飛び方という問題には、なによりも魔理沙が一番話しやすい相手にも思えたからだった。

魔法使いを名乗る彼女だが、早苗が人里や宴会などで聞いた話を総合するに、魔理沙は生来、当たり前のよう

に飛べていた種類の人間ではないらしい。
　ならば、少なくとも彼女は本心から早苗のことを馬鹿にするようなことはないだろうし、何かのヒントを得られるかもしれない。
　案の定、魔理沙は笑うでもなく、黒いとんがり帽子のつばをいじるようにして、言ってくる。
「みたとこ十分だとおもうけどな、早苗は。ここの連中にもそう引けはとらないぜ？」
「でも、上手になっておくに越したことはないですよね？」
「……まあな。何だって下手で困ることはあっても、上手くて困ることはないもんだ」
　口元に歯を覗かせて、魔理沙は言う。
　あるいは、早苗の心中を汲んでくれたのかもしれない。いつも大雑把に、傍若無人に振る舞ってはいるが、この自称・普通の魔法使いがその第一印象よりもずっと繊細な乙女で、何よりも努力と修練を重んじているというのは、早苗も理解していた。
「けど、なんでまた今になって練習なんだ？」
「その、それは……」
　核心に踏み込まれ、思わず早苗は口籠ってしまう。話の流れとして黙っておくのは不自然だが、その理由はやはり素直に口にしにくいことでもあった。
　気恥かしさに魔理沙のほうを向いていることができなくなって、早苗はつい視線をそらしてしまう。
「どした？　どっか調子でも悪いのか？」
「違うんです」
　案じる声に、早苗は小さく首を振る。
「……そのですね。こっちに来てから結構経って、幻想郷でのやりかたには馴染んだつもりだったんですよ、私なりに。……でも今回、霊……魔理沙さん達と一緒に初めて異変の解決に挑んでみて、やっぱり色々と思うところがあったもので」
「……？」
（前言撤回……）
　なおも不思議そうな顔をする鈍感な魔理沙に、早苗は顔をあげ、半ば自棄気味になって声をはり上げる。
「ですから!!　あんなに大変だとは思わなかったんです。空を飛ぶのが!!」
　ムキになって叫んだ早苗に、魔理沙はしばし、きょとんとしていたが――
　やがて早苗の言っていることが飲み込めてきたのか、小さく俯いて、肩を震わせはじめる。
「わ、笑い事じゃないでしょう!?」

「……いや、だってなあ？　現人神だなんだとあんなに大きな口叩いてたお前さんがねえ？　……あー、わかったぜ。分かりすぎるほどよく分かったぜ？」

「うるさいですねっ！　妖怪退治が楽しすぎるのがいけないんですっ!!」

　赤面しながら、早苗は肩を怒らせる。

　思えば、『知らないどこか』を目指して飛ぶなんて、早苗にはこれが初めての経験だったのだ。

　外の世界にいる時は、早苗の行動範囲のほとんどは神社と学校、駅前を中心にした数キロ程度のものだった。もし迷ったときだって、地図でも携帯でも、調べる方法はいくらでもあった。

　神様二人と共に幻想郷にやって来た時も、地底の怨霊騒ぎの時も。早苗は自陣ともいえる山の上の神社で、来訪者を待ち構え、迎え討つ側だった。

　けれど、今回。

　空飛ぶ船を追いかけて神社を飛び出し、道すがらに妖怪を退治して、不可思議アイテムを集めながら、果ては魔界まで突き進み――

　はじめての異変解決の主人公を務めてみて、早苗はその経験の差を思い知ったのだ。

　最初からゴールの見えているマラソンや遠足とは違う。異変の中心地がどこなのかは、飛び始めた時には分からないのだ。

　どこまで飛べば、いつまで飛べばいいのかも分からない中で異変を追いかけて、出くわす相手と次々に弾幕ごっこを繰り返すのは、早苗の想像していた以上に大変なことだった。

　神様二人の加護という、誰に比べても十分すぎるほどの助力を得ていながら、なお足りず。

　東風谷早苗のはじめての異変解決は、騒動の中心地に辿り着いた時点で余力のほとんどを使い果たし、挙句には帰り道まで見失うという無様な結果に終わってしまったのだった。

　悔しくないわけが、ない。

「……正直に言えば、昔から神奈子様や諏訪子様と、私の空の飛び方が違うって言うのは分かってたんです。でもそれは、単に神様と私の在り方が違うからで、当り前のことだって思ってました」

　それが、〝違って〟いるのではなく、〝劣って〟いるのだと――気づかされたのは。

　空を飛ぶ楽園の巫女との勝負で、逆立ちをしても追いつけないような実力差を見せつけられてからだ。

「なるほどな、それで飛ぶ練習か」

「……いけませんか？」
「そう拗ねるなって。悪かったぜ、笑ったりして」
「うー……」
　まだ幾分、真摯さに欠けてはいたが。ひとまず謝罪があったので良しとすることにして、早苗は膨らませていた頬を元に戻す。
「……まあ、正直あれは色々反則だろとか思わなくもないぜ。言いたいことはよく分かる。やる気のない時は万事適当なくせに、ここ一番じゃまず絶対に負けないからな、あいつは」
　早苗よりもずっと長い間、あの紅白の巫女を見てきたであろう魔理沙の言葉は、より深く実感がこもっているように聞こえた。
　いまだに早苗も、あれをどう表現していいのかわからない。
　……あえて言葉にするならば、弾を避けるというよりも、彼女のいる場所を弾幕が避けて通るかのよう。
　布陣を敷き隊列を組んで指揮される策謀（ブレイン）の弾幕も、怒涛のようにうねり押し寄せる物量（パワー）の弾幕も。
　あの紅白の巫女は、ただふわふわと浮かびながら、ほんの半歩、身体を左右にずらすだけで事も無げに攻略してしまう。

　——その半歩で、まるで弾幕ごっこの規則（ルール）の外側へ踏み出しているんじゃないかと思いたくなるほどに。
　同じ巫女で、同じ人間であるはずなのに。
　ただ空を飛ぶ、それだけで——
　彼女はあんなにも、強い。

　なんとなく沈みかけた思考を、かぶりを振って振り払い、早苗はごしごしと頬をぬぐう。
「はあ。もういいです。……赤っ恥ついでに魔理沙さんにも質問、いいですか？」
「ん？　なんだ？」
　近くで採った茸と睨めっこをしていた魔理沙が、ふと顔を上げる。
「魔理沙さんは、どうして箒なんですか？」
「こいつか？」
　魔理沙が脇に抱える箒を指差し、早苗は頷いた。
「別にそれがなくちゃ飛べないってわけじゃないんですよね？　なのに、どうして箒で飛んでるのかなって」
　普通に考えて、一本の柄の上に身体を預けるのは、身一つで空を飛ぶよりもあれこれと不自由があることは想像できる。それなのに、あえて魔理沙が箒を選んでいる

理由が知りたかったのだ。

「前から気になってたんですけど、いい機会ですし。よかったら聞かせてもらえませんか？」

「……あー」

「？　なにか、答えにくいことでも？」

早苗は単に、興味から聞いてみただけだったのだが。

魔理沙はまるでなにかの図星を突かれたように、茸をぽいと放り投げて言い淀む。

やけに答えにくそうにしている魔理沙に、早苗が首をかしげたとき。

「ふむ、それは私も興味がありますね」

ひゅう、と静かな風のひと吹きと共に、まったく違うところから、聞き覚えのある声が割り込んできた。

■４■

「ご無沙汰してます。魔理沙さん、早苗さん」

　樹齢百年を超えるであろう巨木の梢をがさりと揺らし、枝に足をひっかけて上下さかさまの体勢で、伝統の幻想ブン屋、射命丸文が顔を覗かせる。

「……盗み聞きは感心しないぜ？」

「いえいえ。これも取材の一環ですよ」

　どういう具合か、文はその姿勢でもスカートだけは最終防衛線をきわどいところでしっかり死守しており、早苗としては非常にその天狗驚異のメカニズムが気になっていたのだが……文は意に介さぬままに胸を反らして『報道（スポイラー）』と記された袖の腕章を示してみせた。

「最近、あちらこちらと新顔が増えてきましたからね、また特集でも組ませていただこうかと思い、こうして下準備にいそしんでいるわけですが」

「わざわざ好き好んで追い払われに行くのか？　物好きだぜ」

「失敬な。私はいつでもどこでも好感度Ｎｏ．１の人気者ですよ。このとおり、清く正しい射命丸。記者は好かれてなんぼの商売ですからね。決して１８位とかそんなことはないんですよ。ええ断じて１８位なんてことがあるものですか！」

　やけに順位を強調して言うと、文は腹筋だけでくるんと上半身を持ち上げた。鮮やかな身のこなしで着地するなり、文は素早く魔理沙との間に割り込むようにして早苗の手を握る。

「そんなことよりも。偶然なことに先程から聞かせていただきましたが、どうやら空の飛び方でお悩みのようですね？　早苗さん」

「はあ……まあ、一応は」

　妖怪の山のご近所づきあいで顔は良く合わせるが、早苗もいまだにこの天狗とは距離をつかみかねている。

　風祝が困惑している間にも、文は好奇心いっぱいの表情を浮かべ、素早く手帳とペンを取り出して詰め寄ってきた。

「それで、どれくらいスランプなんでしょうか？　もう二度と飛べないくらいに？」

「あ、いえ、そこまでは」

「……なんだ。つまらない」

　早苗がそう答えると、文は露骨に落胆の表情を見せ、大きく溜息をついて手帳をしまい込む。

その手のひら返しっぷりときたら見事なもので、早苗は怒るのも通り越して呆れてしまうほどだった。
「あのな。ややこしくなるから出てくるな、お前は」
こちらも同じような気分なのか、魔理沙も面倒そうに視線を険しくしていた。
「む。これは心外ですね。早苗さんがお悩みのようですから、ここはひとつ幻想郷最速にして人生経験も豊富な私から、直々に空の飛び方についてレクチャーして差し上げようというのに」
「誰も頼んでないぜ？　裏しかないような顔して言われてもな」
「そんな。新聞に表も裏もあるものですか。これは純然たる好意ですよ？　それがそんな悪しざまに言われるなんて……ひどい！　あんまりじゃないですか！」
よよよ、と泣き崩れてみせる文に、魔理沙はあくまで冷静な顔。
「普段の言動改めてから言うといいぜ？」
「あ、バレてました？」
しゃあしゃあと立ち上がり、文は片目だけを細めて口元を緩める。人を食った表情でペンの尻先をびしっと早苗に向け、
「……とはいえ、お隣さんのよしみです。助言はやぶさかではありませんが？」
「……ええと……」
思わぬ方向に転がり始めた展開についていけず、早苗が答えに窮していると、魔理沙がうんざりとした口調で忠告してくる。
「やめとけ早苗。どうせロクなことにならないぜ」
「……おやおや魔理沙さん。今日は随分とご機嫌斜めですね？　なにか虫の居所でも？」
「趣味が悪いって言ってるんだぜ。天狗の飛び方が参考になるもんか」
「あやや。嫌われたもんですねぇ」
文はあくまでも笑みを崩さない。
恐らくは、この白黒魔法使いが速さにおいて天狗をひとつの目標にしているのであろうことを、陰でそのために多くの努力を積み上げているだろうことを、すべて承知の上で。
千年以上を生きているという天狗は、くすりと口元をほころばせたままに、決定打となる一言を打ち込んでくる。
「でも、霊夢さんなら文句も言わず見事に使いこなしてみせましたよ？」
そんな事を言われて。

黙っていられるほど、早苗は無欲でも、謙虚な子でもなかったのである。

◆ ◆ ◆

「つまり、先日の地霊騒ぎのときの補助（オプション）の応用ですね。あの時は通信珠を使って調整しましたが、今回は直接私の妖力を早苗さんと同調させることになります。……まあ、早苗さんは天狗の信仰も集める山の神社の風祝なわけですから、そこまで細かい調整をしなくとも扱えるでしょう」

少し場所を移し、頭上の開いた苔生す大岩の上で、早苗は緊張の面持ちを浮かべていた。背中にはぴったりと文が寄り添い、腰には片手が回されている。

もともとの身長差と下駄の高さもあり、ちょうど背中から腰抱きにされているような格好だ。わけもなく緊張に鼓動が早まり、頬が熱くなる。

「では、いきますよ？」

「…………はい」

愛をささやかれているように見えなくもない体勢に、何だろこの状況、と我に返りかけるのを押さえ込み、早苗は呼吸を整えて意識を集中させた。

流されるままに訪れた事態ではあるが、最速を誇る天狗の速さ、というものに興味があったのも事実である。

瞬間。

「ひゃんっ!?」

耳元でくすぐったいほどに近い文の声と共に、握られた手のひらから、ぞわぞわと背中が逆立つような力が流れ込んでくる。

「……ふふ。そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。そんなにカタくならずに、もっと力を抜いてリラックスしてください？」

「……わ、わざと言ってますよね、それっ」

にんまりと微笑む文に怒鳴り返そうとするも、耐えようのないむず痒さに、早苗の声は震えるばかりだ。

幽かな森の香りと共に、静電気を薄めて引き伸ばしたようなくすぐったさが、風祝の服の下を這い上がり、背中の左右、肩甲骨の下のあたりに集まってゆく。

「っ……」

「あ、いい表情ですねぇ。一枚いただきますよ？」

「ま、真面目にやってくださいっ」

「失敬な。いたって真面目ですよ？」

文の指は、いったい何を食べていればこんなにしなやかで細くなるのかと思えるほどに瑞々しくて、けれど同

じ女性とは思えないほどに逞しく力強い。早苗がかなり本気で力を入れてみても、びくともしないほどだ。

「……んっ……！」

くすぐったいのに振りほどくこともできないまま、自由を奪われ、早苗は身体のうちに流れ込んでくる妖力を懸命に制御下に置こうと息継ぎを繰り返す。

「おーい。大丈夫か、早苗？」

魔理沙の声もどこか遠い。

いつしか、早苗の周囲には高速で渦を巻く風が圧縮されていた。周囲の気圧すら変化させる高密度の風を、事もなげに操りながら、文はそっと早苗の顔を覗き込んでくる。

その顔がまたものすごく近いせいで、早苗は思わずああ綺麗な睫毛だなあ、羨ましいかも、などと余計な事を考えてしまうのだった。

「もしもし、早苗さん？　そろそろ制御をお渡ししますが、宜しいですか？」

「え!?　あ、ああ、はいっ」

慌てて首を振り、神妙な面持ちで、早苗は小さく息をのんだ。文がコントロールを預けてきた風の渦に、精神を集中させながらそっと手を伸ばしてゆく。

圧縮された風を掴んだ瞬間。全身が一瞬、突風のようなもので激しく煽られる。

「………………っ!?」

音のない風の塊が、身体の中心で膨れ上がる。

そっと閉じかけていた目を開けてみれば、早苗は自分の身体を高密度の風の塊が取り囲んでいるのを理解した。足元からふくらはぎ、腿、腰、お腹、胸を経て頭の先まで。らせん状に渦を巻く風の流れが、ざわざわと揺らめき、うなじを逆立てる。

特に力を強く感じるのは肩甲骨のあたりで、そこに力強くはばたこうと力を蓄える見えない翼のようなものを感じる。

（……凄い……!!）

いまにも天高く飛翔せんばかりに、強大で荒々しい力が全身に漲り、早苗は思わず身震いした。

「――――、――!?」

岩の下では、魔理沙が何事かを叫んでいた。

気圧差のせいか、彼女が必死に口を動かしているのはわかるのだが、その声はまるきり聞こえない。耳鳴りのような騒音が、聴覚を塞いでしまっているようだった。

『さて、準備完了ですね』

すぐ後ろから、文の声。

早苗は硬い唾を飲み込み、自分のものではないように

力を滾らせる手足を意識する。

『それでは――どうぞ、飛んでみてください』

「……はい」

答え、首肯して早苗は、軽く地面を蹴り――全身を取り巻く風の渦に干渉する。

が。……さっきまで余計な事ばかり気にしていて、集中が疎かになっていたのが良くなかったのか。

限界まで引き絞られ、圧縮されていた風は空を撃つ力強い翼となることはなく、早苗の意図とは全く逆の方向に、瞬間的に解き放たれていた。

「きゃ…………!?」

奇跡の神風など、比べ物にもならない。

空気の塊が、思い切り早苗の身体を真上に跳ねあげる。一点に集中していた風は、発条が弾けるように猛烈な勢いでそのすべてを開放し、渦を巻き波打ちながら、森の木々を薙ぎ払って風祝をはるか空まで撃ち上げていた。

視界から一瞬で森がフレームアウトし、意識すらも置き去りにして、少女の身体は蒼空の彼方へと吹き飛んでゆく。

「っ、ぁあああああ――――…………!?」

悲鳴の余韻だけを後に残し。白い水蒸気の尾を引いて。

青白の巫女の姿は、まさに天つ狗、流星のように空の一角の小さな点へとなって、きらりと輝きを残して消える。

「うわぁ……」

「あややや……」

緩やかに吹き抜ける風の余波の中。

その場に取り残された魔理沙と文は、早苗の消えていった方角を見上げながら、ぽかんとした顔をするばかりだった。

■5■

　橙と紫を混じり合わせながら、山の端に沈みゆく夕日の中を、ふよふよと漂うように飛ぶ風祝の姿があった。
「……今日は厄日ね……」
　飛ぶというよりは浮かんでいるというほうが正しいだろうか。ボロボロの巫女装束を引きずって、早苗はすっかり暗くなった空をゆく。
　手足は鉛のように重く、疲労がずっしりと肩にのしかかる。疲れ切った身体では浮かぶのが精いっぱいで、向かい風が吹いてくれればそのままどこかに飛ばされてしまいそうだ。
　天狗の起こす風の暴れ度合いと言ったら、およそ早苗の理解をはるか超えていた。魔法の森から大結界の端までをほとんど一瞬で吹き飛ばされ、そのまま沼に突っ込んでようやく止まるほど。
　泥まみれの身体はできるだけ洗い流したが、湿った服はまだ生乾きで、身体に張り付いて冷たく自由を奪う。土の匂いの残る髪も不快で、ますます疲労を倍加させるようだ。

　どうも早苗が操る風と、文の使う風の質は、似ているようでいて本質的にはまったく異なるものであるらしい。あんなものを乗りこなすなんて流石は天狗（アマツキツネ）、と言うべきなのかもしれないが。
「あーあ……」
　砂が混じってぼさぼさに乱れた髪を掻き、泥に汚れて破れた袖と、応急処置に端を結んだ袴を見て、早苗は大きくため息をつく。本当にくたびれ儲けの一日だった。
（魔理沙さんの言うとおりだったなぁ……）
　天狗という妖怪の速さは、たとえてしまうならジェット機やレーシングマシンに近いのだろう。速さのために様々な工夫を凝らし、余計な機能を削ぎ落して、そもそも種族として生まれながらに人間とは異なる。
　最速を誇る彼女達は、ただあるがままに速く、やはり自分たちの飛び方など些細なことと、気にも留めていないのだ。
「……ちょっと、凹むなあ」
　才能とか、天稟とか。ちょっとやそっとでは埋めようのない差、というものを立て続けに見せられて、いささか早苗も挫け気味だった。
「はぁっ……」
　胸の奥のどこかにある、元気を貯めておく袋が破れて、

中身がこぼれおちていくかのよう。

　低下するテンションそのままに、ゆるゆると高度が落ちてゆく。みるみる近付く地面に、いけないと思いはすれども、思うように身体に力が入らない。

（……あ、やば……）

　このまま落ちてしまえば、もう飛び上がれないかもしれない。

　ぼんやりとかすむ思考の中、他人事のようにそう思った早苗の腕を、強く引っ張り上げる力があった。

「やっと見つけたぜ」

「……魔理沙さん？」

　失速しかけた早苗を支えるように、箒にまたがった白黒の魔法使いは速度をゆるめて、宙空に静止する。

「探して……くれてたんですか？」

「……成り行き上な。お前んとこの神様も心配してたぜ」

　大丈夫か？　と眉を寄せている魔理沙に、早苗は安堵を隠しきれなかった。

　身体を支えられるみっともない格好のまま、それでもせいいっぱい、笑顔をつくって答える。

「それなりに酷い目に遭いましたけどね」

「そうか」

　それ以上、何も聞いてこない魔理沙に、早苗は彼女がまた、霊夢とは違った意味で幻想郷の中心なのだという事を理解していた。

（ああ、もうっ……）

　思わず涙ぐみそうになって、早苗は慌ててごしごしと両の頬をこする。

　そんな早苗の胸中を知ってか知らずか、魔理沙は早苗を支えたまま、ゆっくりと移動を始める。さりげなく負担にならないような速度を保ってくれているのが、早苗にも良く分かった。

「それにな、さっきの答えがまだだっただろ」

「答え？」

「私が、どうして箒（こいつ）を使ってるかって話だ」

　地平線にかかるほど傾いた西日のせいで、魔理沙の表情はうかがい知ることはできなかった。まぶしさに目を細め、早苗は箒を操る魔法使いの横顔のシルエットを見つめる。

「空の飛び方だけは、誰かの真似をしたくなかったんだ。……だからだぜ」

　いくつものスペルを模倣し、魔道書を、呪物を蒐集する魔法使いは。そっぽを向いたまま、けれどどこか気恥かしそうに言い切った。

　それは、つまり。

普通の魔法使い霧雨魔理沙の、矜持。
ありとあらゆるものを飛び越えてゆく、空を飛ぶ程度の能力をもつ楽園の巫女に、並び追い付くために。ごくごく普通の少女が立てた誓いなのだ。
そして。その言葉に、早苗もまたもう一つの光景を見ていた。
ずっと、ずっと昔。
幼い頃に見た、東風谷早苗の『特別』のはじまりを。
「どうだ、参考になったか？」
「……そうですね。少しは」
「おいおい、それだけか？　酷いぜ。せっかくとっておきの秘密だってのに」
いつしか、早苗は随分と心の中が和らいでいるのに気付く。くすくすと微笑み交わす二人の視界に、遠く色鮮やかな影ふたつ。
「ほれ、お出迎えだぜ」
「早苗ーーーっ!!」
ずっと探し回ってくれていたのだろうか。血相を変えた諏訪子が、声を上げながらまっすぐに飛んでくる。
がばっと早苗に飛びついて、守矢神社の小さな神様はいまにも泣きだしそうに動揺していた。
「心配したんだよ？　天狗に騙されて酷い目に遭ったたって!!　いくら興味があるからってホイホイついてっちゃダメじゃないか!!」
「ちょ、諏訪子様、苦しっ……」
ぎゅううと首に飛びつかれてもがく早苗だが、夢中な神様は全く気付いていない。
「もう、本当に心配したんだから……って、どうしたのその格好!?」
「え？」
言われて、改めて見下ろしてみれば。早苗の格好は惨憺たるもの。袖は泥染みとともに汚れ、袴も裾が破け、鉤裂きがいたるところに見受けられる。
背中には墜落した時の土埃を残し、目元も涙の跡に赤く、髪も乱れ放題。そりゃまあ、神様も誤解しようというもので。
「っ!!　嫁入り前の女の子になんてことをっ!?　それも天狗にやられたんだね!?　もう頭に来たっ!!」
「あー、おい、諏訪子？」
「ううん、何も言わなくていいよ早苗!!　怖かったね。でももう大丈夫だ、二度とこんな気が起きないように、あいつら徹底的に思い知らせてやるっ!!」
言うなり、どす黒いオーラが諏訪子の周囲を巡り始める。近付くだけで寒気さえ覚えさせる穢れの渦が、土着

神の頂点である神様を中心に鎌首をもたげていった。
「目標、妖怪の山っ!! 距離良し、方角良しっ!! 最大出力!! 祟りなら任せろー!!」
「やめてー!?」
バリバリと禍々しいオーラを発し始めた諏訪子に、慌てて止めに入る風祝。しかし諏訪子は聞く耳持たず、大きく腕を振り上げ――
「落ち着け諏訪子」
「あうっ!?」
守矢神社の祟り神様が、編み上げた呪詛を打ち放たんとしたまさにその瞬間。神奈子が思い切りその頭をひっぱたく。
ずれた帽子に視界を塞がれ、暴れる諏訪子を、あきれ顔で守矢の軍神は抱きよせた。
「なにするのさ神奈子っ!?」
「こっちの台詞だ。過保護もいい加減にしろ。祟るのまでやめろとは言わんが、幻想郷に来てからこっち、早苗がなんのためにあれこれ走り回ったと思ってる。そんなものぶっ放して全部台無しにするつもりか?」
「…………ぅ」
ずいと鼻先を突き付けられての正論に、冷静さを取り戻した諏訪子が言葉を失う。

まったく、と神奈子は腕組みをして、諏訪子と早苗を交互に見て溜息をついた。
「思い込みの激しさは先祖譲りだな」
「……苦労してそうだな?」
「まあね。こんなのが面倒でこっちに来たっていうのに、気苦労が増えるばっかりだ。早苗も平気かい?」
「は、はい……けほっ」
早苗はまだ喉を押さえて苦しそうにしていた。神奈子はそれをよしよしと撫でてやり、諏訪子の帽子をポンと押さえながら、魔理沙のほうに向きなおる。
「いろいろ世話を焼かせて済まなかったね」
「いんや。行き掛かり上だぜ」
「そうかい。……暇があったらまた神社まで来るといい。博麗の所よりはいいもてなしをしてやるぞ」
「そうだな。期待しとくぜ」
魔理沙はそう言うと、箒の先端を切って方向を変える。
「さて。そろそろ良い子は帰る時間だな。じゃあな、早苗、神奈子に諏訪子も」
「ああ」
手を振る魔理沙に神奈子がこたえ、早苗と諏訪子も慌てて頭を下げる。それを肩越しに振り返って、白黒の魔法使いは遠く魔法の森へと飛んで行く。

「……………」

きらきらと、星の軌跡を残して飛びゆくその背中が見えなくなるまで、早苗は魔理沙を見送っていた。

やがて、静かに顔を上げた早苗に向けて、神奈子は諏訪子と共にそっと手を差し伸べる。

「さあ、帰ろうか」

「……………」

沈む夕日を背中にする二柱の神様の姿を見て。早苗は静かに、大きな深呼吸をひとつ。

重苦しい胸の中の澱みを全部追い出して、この幻想郷の風をいっぱいに吸い込むように。

「どうした？　早苗」

「……ちょっと、思いだしちゃいました」

「早苗？」

また不安そうな顔をする諏訪子に微笑むと、早苗は神様二人に飛びつくように、その腕を取った。

「む」

「わぁっ!?」

ぎゅっと抱きつかれ、神様たちがわぁっと声を上げる。

――そうだ。

東風谷早苗が、人でありながら神として、祀られる存在となったのは。

危ないと叫ぶ背中からの声を振り切って、この幻想に満ちた空を目指したのは。

きっと、きっとこんな風になりたかったからだ。

今この瞬間、こうして同じ空にいて。手を取り、触れ合い、その温もりを感じることのできるように。

大好きな神様たちを、いっぱい独り占めできるように。

「私は、神様と一緒に空を飛びたかったんだなって！」

■６■

季節は巡り、夏。
「じゃあ神奈子様、諏訪子様、行ってきますっ」
蒸し暑い夜の帳の中、灯りにも虫がちらほらと集まっている。玄関でとんとんと片足立ちになって靴を履きながら、早苗は手早く身支度を整える。
「暗いから気をつけるようにね」
「あんまり遅くならないうちに戻ってきなよ、早苗」
「はいっ」
玄関まで見送りに来ていた神奈子と諏訪子にこたえると、早苗は玄関を開け放ち、たんっと鋭く地面を蹴った。
風をつかみ地を蹴って、半分だけの月とまばらな星の瞬く、うっすらとした曇りの夜空へ。風祝の身体はふわりと舞い上がる。
「…………」
みるみる小さくなるその背中を見上げ、諏訪子はまだ落ち着かない様子だった。帽子の目玉と一緒になって眉尻を下げ、ぽつりとこぼす。
「すっかり夜遊び癖がついちゃって。悪い付き合いとかしてなきゃいいけどなあ……」
どういう具合に吹っ切れたものか、早苗はあれ以来、積極的に幻想郷のあちこちを回るようになっていた。
先日も夜中に突然、探検に行ってきますと言いだして出かけ、やけに可愛らしいエイリアンとやらを連れ帰ってきてひと騒動あったばかりだ。
「今日だって、こんな遅くに出かけなくてもいいのに」
「心配性だねぇあんたは」
呆れた表情の神奈子に、諏訪子は口を尖らせる。
「……いいじゃないか別に。神奈子は心配じゃないの？」
「そんなのは、私達が一番よく分かってることだろう？　お前も最近は稽古付けてやってるんだろうに」
自信たっぷりに、守矢神社の主神は微笑んだ。
「神様が二人も揃ってお墨付きをあげてるんだ。うちの自慢の子が、ちっとやそっとでこたえるようなことはないさ」

◆　◆　◆

山頂の神社からも程よく離れ、渓流の涼やかな流れを聞く夜空の上。月が緩やかな半弧を描き、森の梢に陰影を落とす中を、梅雨明けの湿った風が吹き抜けてゆく。

「お待ちしてました、文さん」

「あややや。……これは一体？」

陽射しの暖かさをわずかに残した宵の空、対峙するのはふたつの影。

かたや、守矢神社への潜入突撃取材を敢行しようとした文。かたやそれを迎え撃つべく待ち構えていた早苗だ。

守矢神社の風祝は、威風堂々と天狗の前に立ち塞がって、御幣を手に、巫女服の袖をはためかせて微笑む。首元には、しゃらりと音を響かせる真新しい翡翠の首飾り。

「毎日こんな夜分遅くまでお仕事ご苦労様です。聞いてますよ？　霊夢さんのところでは大分苦戦されたそうですね？」

「これはまた随分とお耳の早いことで」

言いながら、文はこっそりとまだ脚に張り付いていた『新聞勧誘お断り！します』特製符（スペル）の切れ端を剥がして放り捨てた。

「先日は大変にお世話になりました。ぜひお礼をしようと思っていたんですよ」

「…………いや、その」

「遠慮なさらずにどうぞどうぞ、さあ」

満面の笑顔の風祝に、妙な気配を感じ取ったか、文はカメラを手にしたままわずかに後退る。

「……ふむ。今日はどうも日が悪いようですね。また後日改めて――」

不穏な気配を嗅ぎつけ、素早く踵を返そうとした文が言い終わるよりも早く、一陣の風が駆け抜ける。

天狗の行く手を阻むように鼻先をかすめる風の一閃は、以前よりも恐ろしくキレを増していた。

「…………」

風祝の思わぬ反撃に、文は思わず押し黙る。

気付けば天には黒雲がにわかに巻き起こり、轟々と猛烈な嵐が吹き荒れ始める。異国からの侵略軍ひしめく大海をも薙ぎ払わんばかりのその風の名は、

「――奇跡『弘安の神風』」

軍神の加護篤き神風を操り、退路を断ってみせた早苗に、さしもの文も気圧されていた。

「ほほう……これはこれは」

それでもここで退いては天狗の名折れと思ったか、しっかりとカメラを構え直し不敵に笑う幻想ブン屋を前に、早苗もさらに幾枚かのスペルカードを示す。

「前回の経験を生かして、私なりに空の飛び方を考えてみました。まずは妖怪退治から始めてみようと思います」

「なかなかの自信、じつに結構ですが――」

叩き付けるように襲い来る奇跡の神風に対し、文は持

ち前の機動力を駆使しての突破を試みる。

　手加減の様子はない。背中から烏天狗の証である黒い翼を広げ、文は音速に迫る速度で立て続けに押し寄せる雨風を潜り抜けてゆく。

「この程度の風では、まだまだですよっ？」

「——いえ。ご心配なく」

　一気に分厚い黒雲を突っ切り、渦巻く嵐を引き裂いて。攻略（スペルブレイク）の手応えに笑みを浮かべた文を、ふいに別の影が取り巻く。

「前回のでコツは掴めました。今度はちゃんと文さんの風、使わせていただきますので」

「……はい？」

　文が怪訝な表情を浮かべたその時だ。早苗は悠々と次のスペルカードを掲げ、宣言する。

「——妖怪退治『妖力スポイラー』」

「……くぁっ…!?」

　ずしん、と猛烈な重圧のようなものが文を襲った。

　視界が傾き、広げた天狗の黒翼からみるみるうちに力が抜けてゆく。軽い眩暈に襲われて頭を振る文を前に、早苗はスペルを展開していた。

「これは……っ!?」

　文は驚愕に目を見張る。がくりと体勢を崩しかけた烏天狗の翼から、手足から、全身から妖気が流れ出していた。早苗が風を通じて文の妖力に巧みに同調し、それを吸い上げているのだ。

「なにぶんまだ不慣れなもので、文さんみたいに力が強すぎる妖怪が相手だと、制御が上手くいかないかもしれませんけど——恨まないでくださいね？」

　にこり。極上の笑顔を見せた早苗の制御によって吸い上げられ、蓄えられた文の妖力は、そのまま鋭い風を象って、雪崩を打って文自身へと襲いかかった。

「あやや……」

　文の頬をつう、と細い汗が伝うのを満足げに見つめながら、早苗は夜空に身を躍らせる。

「さあ、次の勝負です!!」

　何人もの少女たちが、華麗な弾幕と機動をもって、遊び踊るその空へ。神様二人と、信仰と、なによりも自身の奇跡（風）と共に。

（了）

【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。
コミケでは初めての参加となります。銅おりはと申します。
このたびはお手に取っていただきありがとうございます。この本、『おおぞらをとぶ』は、当サークル一〇冊目のＳＳ本となります。
星蓮船本編終了後、Ｅｘストーリー開始前からはじまる（季節的にやや改変がありますが）物語であり、自機として初めての異変解決に乗り出した早苗さんが、同じ自機である霊夢や魔理沙の空の飛び方を通じて、自分がなぜここにいるのかを考えたりするお話です。
世の名シューターの方々が叩きだす華麗なリプレイを見て、自分自身の見るも無残なプレイ記録を思い出して落ち込んだり、もっと頑張ろうと決意を新たにするのは誰しも通る道なのではないかと思います。
今回の早苗さんの葛藤は、ある意味でそこに近いものかもしれません。
さて、今回の執筆中ＢＧＭは、星蓮船のＥｘステージ『夜空のユーフォーロマンス』でした。どこか怪しげで、けれど心をざわざわとさせる夜の冒険をイメージさせる曲調が大好きです。
今回もいつもどおり、設定考証や製本等に関しては白身氏、Ｒｉｚａ氏にお世話になりました。この場を借りて感謝いたします。
そろそろ紙幅も尽きてまいりました。拙い部分は多々ありますが、少しでもお楽しみいただければ幸いです。

――それでは。
また次の機会にお会いできることを願って。

「おおぞらをとぶ。」
発行　平成二十二年八月十四日　「Ｃ７８」
折葉坂三番地（オルハザカサンバンチ）
銅（あかがね）おりは
http://oruhazaka.blog28.fc2.com/
http://members.jcom.home.ne.jp/oriha/index.htm

There are three kind of Shooters ?

Those who seek strength, Those who live for pride, and Those who can read the tide of battle.

But her ...

東方project Fanbook
2010.8.14 発行
折葉坂三番地